

「コロナ禍の1年」題材に6年生が映画制作

東京都昭島市立つじが丘小学校

コロナ禍の中で過ごした1年間を映画として記録に残そう。東京都昭島市立つじが丘小学校（上田祥市長、児童550人）の昨年度の6年生は、総合的な学習の時間を使い、映画制作に取り組んだ。新型コロナによって多くの行事が中止になり、最高学年として活躍する場が大幅に減ったが、与えられた環境の中でできる最大限のことにチャレンジしようという企画。映画は本編とメイキング映像を合わせて50分以上あり、保護者を招いた上映会は感動に包まれたという。

現実の学校行事を物語に組み込む

映画のタイトルは「最強の笑顔」。コロナ禍によって活動が制限された生活を送って5・6年生対抗のクラスマッチや宿泊体験学習など、児童2人が夢の中で習った場面も映画のストーリーの中に組み込んだ。教師から手渡されたのは石と貝殻。この手紙を使い、ゆずの「スマイル」を使用した。見えないものが見え、聞けないものが聞こえるという。その後、クラスで特別支援学級6年生の男子児童が校内で行方不明になる事件が起き、石と貝殻を使って探し出す。その後、2人は周囲の友達の協力を得ながら、教師のお母さんの意味を探り、どんな時も笑顔であり続ける大切さに気づき、みんなを元気に

映画のタイトルは「最強の笑顔」。コロナ禍によって活動が制限された生活を送って5・6年生対抗のクラスマッチや宿泊体験学習など、児童2人が夢の中で習った場面も映画のストーリーの中に組み込んだ。教師から手渡されたのは石と貝殻。この手紙を使い、ゆずの「スマイル」を使用した。見えないものが見え、聞けないものが聞こえるという。その後、クラスで特別支援学級6年生の男子児童が校内で行方不明になる事件が起き、石と貝殻を使って探し出す。その後、2人は周囲の友達の協力を得ながら、教師のお母さんの意味を探り、どんな時も笑顔であり続ける大切さに気づき、みんなを元気に

学校経営

昨年度の6年生は、同校は2校の統合によって平成28年度にできた新設校。上田校長は旧校の時代から管理職をしており、初代校長として赴任した。過去には卒業生と劇団を立ち上げて運営するなど演劇に明るく、同校でも一貫して表現活動に力を注いできた。授業での取り組みに加

「だれもが笑顔になる学校」の実現を目指す



5・6年生対抗のクラスマッチの場面を映画制作のために撮影する児童（左）

え、児童有志から音楽やダンスなどの発表の場が欲しいといった提案を受けると、積極的に学校教育目標「だれもが笑顔になる学校」に応援している。昨年度の6年生は、5年生のステージフェスティバル（学芸会）でオリジナルの劇を作った。一つ一つのものを創り上げる経験をしており、周囲からも高く評価されていた。同校には通級の特別支援教室もあり、ステージフェスティバルではアンメーション作りを実施。今回の映画では、多様なアイデアを価値制作にその経験を生かす。こうして蓄積と上田校長や6年生担任の支援があった映画制作が実現した。学校教育目標の「だれもが笑顔になる学校」を実現するために、職員も含まれる。一人一人が、「なりたい自分になれる」ようにアプローチする姿勢を大事にしている。上田校長が映画制作を通して子どもたちに伝えたかったメッセージは、「コロナ禍による制限の中にあっても、表現することは楽しいことなんだ。できないことがあっても知恵を絞れば、できることをたくさん見つけられる」ということ。コロナ禍は不幸な出来事ではあるものの、「こうした経験をたくさんさせることで、子どもたちが生きていく社会はどんなふうに変化するかわからない。どのような状況になっても、自分なりの楽しみを見つけたら、人と協力しながら知恵を出し、課題を解決したりする力が大事になる。こうした基礎を培い、前に進んでいく場になるように引き続き努めていきたい」と強調した。

でも、「それ